

【史料】

近江商人の道中記『木曾日記 三』

末永國紀
本村希代
奥田以在

『木曾日記 一』（前々号）

『木曾日記 二』（前号）

凡例

- ・原文には適宜読点「、」を付した。
- ・原則として常用漢字を用い、人名など固有名詞については原文の文字をそのまま使用した。
- ・かなは現行のひらがな・カタカナに改めた。
- ・意味が通じにくいのが原本のままとした時は（ママ）を加えた。

「表紙木曾日記 三」

隣のあるし故ありて暫く西の家につりける、はしめに招かれて窓の月てふ菓子をおくるとて
時またバヤがて光りの照ましてひかしに出ん窓の月影

隣の子の奉公にゆきけるに饞別して小倉の帯をやるとて

捨をかて日に幾度もしめなをせゆるむハ帯と心なりけり

九月中頃に旅にたつとて

秋風のふくにまかせて旅すなり木の葉のことく身を軽くして

冬の日下総の国筵打といふ渡し場にて

名にしおは、筵うちはれ冬の日のわたし待まの風よけにせん

春の水

すえつみに袖師かうらにいでぬらん梅か香匂ふ葛飾かつしかの水

梅

鶯のつぐると東風の送る香に梅の咲しハゆかでもしる

葛飾の梅

埼玉郡ハ葛飾郡の西に隣れり

いかほとに花さきたまに匂ふともよその色香にかつしかの梅

茶

梅か香を桜のいろも数ならず薄山吹の茶の煮花には

春の野

佐保姫ハこゝにすみれか紫のねすり衣の色そゆかしき

同 狂

遊ぶため春の野にいて、わるさするあの子供等に土ハつきつ、

葉と共につめるはかりぞ嫁な草われむしりしと人にかたるな

雨後の牡丹

ふかミ草花のふうじめやぶらしとぬらしてひらく春雨の後

暮春

佐保姫の名残姿の深ミ草一際目だつ花の粧ひ

四朔の牡丹

きのふ迄春の名残の花とミしけふハ卯月の色深ミ草

杜鵑

杜鵑さく度にうたよまんとてつへいかきて血を出しにけり

まどろまハ聞でや過んほど、きす蚤も今宵のなさけなりけり

螢

声かけて招き追ゆくたをやめをしらぬそぶりに飛螢かな

蟬

日盛りハ木の葉も草もしほる、にかれぬ梢のせミのこゑく

唯一の神の森にも此頃ハつくくほうしこ、かしこなく

天神のめでさせ玉ふ梅の木につくし恋しとなく蟬の声

酒のミの宿の庭とて蟬らまでじゆくしくさしとなくそつれなき

大暑

いかにせん蠅打た、く力さへなく蟬に猶まさるあつさを

堪かたや瓦にゑりし立波もにえかへるかとミゆる日盛り

夕立

いそぎつ、馬の背ほと山越て空さりげなくはる、夕立

欄間に扇面おほくはりし下に昼寝して

はりつめて風ハらんまをとをさねと扇の下にぬるぞ涼しき

紫陽花

七ばけと聞バ狐のたくひかも煮たらハとんなあぢさいやせん

初秋

うた、ねの夢驚かす風の音けふわがかども秋やきぬらん

七夕

天地の尽ぬちきりの七夕ハ逢初てより幾夜ぬるらん

于羅盆

絵でうちん西瓜柿梨子餅団子月も坊主も丸さぼんの夜

秋

野のむしもミネの小鹿もなく頃にわらふもめんハ秋をしらずや

粟黍も稲穂もたる、秋風に卷あけたるハ今朝の犬の尾

うちつ、く秋の日和をうれしミテ木綿のゑめる遠近の畠

黄蜀葵 和名とろ、又ねり

あつけれと夏ハいねりととろ、花時えかほなる初秋のてり

雁来紅

葉けいとう色まさりしと見るあした遠く聞ゆる初かりの声

母のもとに葉けいとうのたねをおくるとて

くれないハ花にもまさる葉けいとううつらぬ色を幾秋も見よ

仲冬梅をミテ

人などか事あらかじめなさらん梅ハこはるにはなつほミせり

同 庭梅の一花ひらくをミテ

佐保姫の春狂言の顔ミせにまづ咲庭の梅の一花

雪

見まほしくひらけハ寒し老の身の思ひ煩ふ雪の日の窓

述懐

事なくハ世にもしられじ様々のうきにたえるもさちにやあるらん

嘉永五年壬子歳暮

思ひきや世にうき事を壬のねにのミなきてとしくれんとハ

癸丑元旦

ながらハ、又よき事も癸のうしと思はで春をいは、ん

世中ハめくる車やうしの春もうことしよりよき事やこん

茄子形といふ銚子を得て

酒のミは下手こそよけれ茄子形はしこ上戸をのミさがらせよ

久しく魚をくハざれば頭にしら雲といふ「虫想」できぬると、をさなきとき聞しに、此ころたえて魚なかりけれハ深山にハすまねど幾日魚なくて天窓にかゝるしら雲ぞうき

二月又筵打をわたりて

むしろ打はれる小舟も布の帆もミな一はいにつゝむ春かぜ

長女におくる

行すえの杖ともたのむ女竹よにむしつくなをれなまがるな

節季かけ取

しめ引て神にいのらバ古掛もはらひ給へや帳けし給へ

古掛も煤もほこりも打はらへ正月前の掃除つゝあでに

打払へわがかさねどもミせのかけこハすゝろなりあきれた御客

甲寅元旦

うしと見しとしハきのふに呉竹や枝をならさぬとらのはつ風

我宿ハまだ大晦日おへなくに春ハきのえのとらの正月

寅の春東の方に新しく蔵を建て

寅としや東のすみにくらたて、猶もさかへよにしむらのミセ

あたらし屋のから紙をはりてやりける時に

幾重はる反古のもしの数々はよむとも尽じ宿のゆくすえ

箒はきに似し杏子あんずの木を植て

植し木や心のちりを箒はきにてつねにはかんとあんずなりけり

弥生のはしめ半次ぬしのミまかりしを吊ふて

けふよりハうき世の春をよそにミて君や浄土の花をなかめん

同中頃に頼母子たもこ構まといふ事なせる日、女の子をまふけしときく、祝ふてやるとて

頼もしや後の色香ハいかならん花のさかりにまふけたる子の

明家

蜘蛛のすハ去年のまゝにて軒ちかくことしの草の生繁るかな

夢

むかし莊周ハ夢に胡蝶となり廬生ハ邯鄲にひる寝して、五十年の棠花を極めたりと、さるかしこき人のたくひにあらで、是ハ賤しきなりハひの東下りの草枕、旅のつかれに、秋の夜も長しともせで宵の間のうたゝねにミシ夢のさま忘れもやらで、さめて後ありのまゝにそしるし侍りぬ

秋風の。吹初てよりいつとなく。梢の蝉の声老て。残る暑氣も日々に薄く。千種の花のいろくくに。咲ど哀れハいと、猶。十寸穂の芒露しげき。庭に音信る初鴈の。かけて来ぬらん玉章の。便も遠き旅の宿。余所の砦のつれなくも。旧里思ふ身にきけと。うつゝ、か夢か淋しさを。慰めかねて起あがり。此方彼方を徘徊り廊の窓の間隙より。隣の方をさし覗けハ。十四五はかりの男の児。物の本あまた取ちらし。横臥ながら草双紙よミける傍に。それか妹と見えて十二三の少女の。百人一首を打ちひろげ。余念なく詠め居たりしが。やがて吟して。千早ふる神代もきかず立田川。からくれなるに水くゝるとハ。とよミて。兄の童児に打向ひ。この歌ハ如何なる心にて侍るぞや。兄の男起直り。膝を正しふして答へていふやう。此歌まことに深き心あり。むかし千早といふ遊女あり。神代といふも遊女の名にて。千早の姉女郎なりしが。千早邪見にして。己か心に合ハぬ客ハ。愛想なくふりけるゆへ。姉女郎のかミ代ハ是を見かねて。屢千早に諷諫して。各苦界の世中なるに。そなたのやうに慳貪に。客をふるとハ何ごとぞや。情ハ人のためならず。努々つゝしミ給へやと。真実て諫むれとも。千早さらく聴容ず。いよく氣随に振舞けるが。人喰馬にも合口とやら。不良ぬ悪漢と馴染を重ね。郭を誘引出されしが。懐さミしくなるまゝに。遂に男に捨られて。かゝる嶋なき破小舟。こなた彼方と

呻吟て。次第に貧苦に迫りつゝ、纒の衣も売尽し。終に乞食の躰になりけるこそ哀れなれ。又神代ハ程なく年季はて、古里に帰り。立田川の辺りなる。豆腐屋に嫁し。富といふにハあらねども。何不足なくくらしけるが。千早むかしの好意を思ひ。尋ね行て救を求めけるに。かミ代さらに聞ずして。われむかし幾度となく。そもじへ諷諷したれども。邪見のそもし聴谷す。心からなる今その形勢。自業自得の罰あたりへ。施すものを我ハもたずと。豆腐のからさへくれざれば。千早今ハ詮方なく。弥飢渴に堪かねて。立田の川に身を投て。水をくゝりて果けるとなり。されバかミ代もきかず立田川からくれなるに水くゝるとハ。と詠給ひしならん。少女打わらひ。扱々むつかしく。長々敷。歌の心かな。しからハ結局の。とハと申ハ。いかなることにて候ぞや。童男声に応じて。されバとよ。千早の幼名を。おとハといゝしとなり。少女又吟じて。うかりける人をはつせの山おろし。はげしかれとハいのらぬものを。此うたの心ハいかに。答へていはく。是ハうかりけりとしてある人を。初瀬の山より。ぞろゝとおろしけるに。山険しくして。思ハず急に落ちたりしかバ。あゝそのやうにはげしくおちよとハ。祈らざりしに。扱もゝ。あぶなき事をしてけりといふ歌なり。少女可笑さに堪かねて。声の限り打わらへる処へ。合の韓紙徐にあけて。児達の母にやあらん。四十はかりの女房の。其さま賤からざるが。従容と立出て。そち達ハ何を笑ふぞ。又百人一首の講釈か。扱もおかしき子供等よと。三人齊しく打わらへバ。さし覗きある此方にも声を吞てぞ笑ひける。漸にして笑ひやミ。少女ハ顔を打しかめ。あれ母さま何としよう。先刻から栄実を三度までたべたれば。廁にゆきたき気味なれど。今に通じがつきはべらず。いかゞなさんと打しほるれハ。母も困りし形勢にて。まだ波のぬけぬ柿をたべしゆへ。其やうに大便秘結するハ。早く廁にゆくべし。ほりだして得させんと。直に廁につれゆけば。少女ハ尻を打まくり。陰囊隠の板をつかミ。猿のごときの顔色して。きバれどゝ更に出ず。母ハ尻穴をさしのぞき。簪の耳搔もて。小口につまりし堅き糞を。漸にしてほり出せば。忽ち諸味の大桶の。呑口の抜たるごとく。ぶつゝしうと飛出して。母の顔から天窓から。肩から襟からだいなしに。穢きものをへりかけしハ。気の毒なりける形勢なり。少女ハほとと吐息つき。やれゝ楽になりましたと。いへバ御北堂顔打しかめ。そなたハ楽になつたかしらねど。悲しやわたしハ糞だらけ。あら臭やあゝきたなや。難面き尻穴よ因果な肛門よ。こりやまあどうせう情ない。いふ声きゝて息子もかけつけ。此形勢に仰天し。手を拱きて忙然たり

しが。流石百人一首の講釈をするほどの童男なれば

葉蟲のごとくに糞をかけられて。青くなりたる御袋の顔

御袋聞て打腹たち。是ほと臭いに歌どころか。早く水くめ湯をわかせと。烈しき声に恠りし。周章ふためきかけ廻り。家内の男女呼立て。水を汲やら火をたくやら。手桶よ杓よ盥よと。上を下へと騒動す。漸にして御袋ハ。汚れし所を洗ひ浄め衣服を更め座になをり。少女の方を打見やりて

うかりけつ人が覗てゐる顔へ。はけしくへれといのらぬものを。

まあく通じてよかりしよと。苦笑して煙管をとり。煙草をすふて快然たり

去にても広大無量の母の慈悲。穢きものを天窓から。かけられながら通しを悦び。肛門を恨みて少女を叱らず。勿躰もなや難有や。焼野の雉子夜の鶴。母の恩沢あのとほり。蒼海却て猶浅し。斯かる恵を世中の。母ある人に告なんと独言する我声に。驚き覚れば小夜風。窓うつ音の凄しく。枕にちかき虫の声。只是旅寝の秋の夜の夢

ほこりがにとくも笑ふもはこするも

た、うた、ねの夢の世中

敷つくし 茶に酔ていく度となく小便に起、出入の敷居につまつさて

此しきハ如何なるしきぞ。しきにもいろく。神ハ正直ハ金色。戸帳ハ錦に五色の彩色。色即是空。空即是色。赤色 赤光 白 色 白光。供養の飲食。律宗一食。高野の木食行者の断食。門徒の肉食。鳥の悪食。坊さま智識で学者ハ博識。殿さま権式御家の格式。正しき御家風。鎌倉式目。故事記に旧事記。委敷書物。御供の雑色。厳しき御家老。それでも色慾。由々しき御大事。御

上屋敷の立々しき御玄閤。御庭の敷石。座敷の敷居。ふくハ板敷勝手の広敷。洪紙合敷薄べり上敷。膳ハ折敷で昼飯中食。扶食ハ御困ひ。賤しき下々貧しき困窮。非人ハ乞食。苦しき世中。悲しき愁場。見るハ棧鋪幕あき拍子木。怪しき曲もの。いとしき順礼。詠めたけしきに。恋しきあの人。逢て嬉しき別れてくやしき。ほしきハ銭金。ひじき干物。御寺で葬式。酒屋に甌。桶屋の正子木間屋の蔵敷。上れハ高直下れば下直。背負た風呂鋪淋しき山中。険しき崖路。雪ふり櫓。侘しき住居も歌ハ敷嶋発句の点色。色紙短冊。大裏ハ百敷。鳴の羽がき百羽がき。しきくかくハ最もおかしき

巳のとし元旦

よつの海おさまる御代にうるハしき朝日の登る空を巳の春

福寿草

ねてまでバこかね色なる福寿草朝日登りてさく窓の本

牛の形ほりし根付を天人の形と取換て

もうあきてうしとみつるを久方の天津乙女とかへし嬉しさ

女のきぬのうつくしきを預りて

から衣ぬしハたれともしら梅のうつり香残す袖そゆかしき

正月の中頃に少女の身まかれるをきゝいたきて
まだ花も咲ぬ若木の思ひきや春のふゝきにおれはてんとは

其としの水無月のはしめ又長女をうしなふて
なよ竹のちからとたのむ杖おれて老の山みちいかゝのほらん

たゝなみた西瓜を見ても孫みても

午の正月

色々の荷物付出しつけこみてかと賑ハしき午の初春

きさらきの頃母のもとへ江戸の花と名つけし物をおくるとて

東路も長閑なりとて江戸の花東風にまかせておくる春の日

晴雨の富士 ある人の歌のおもしろき趣をかりて

あし高に雲の衣をかゝくれハふしのあたりもやかて見えなん

情うすき人のこゝろを

我うゑし梅ともめでぬ心にハ余所の花とて隔てなからん

若紫

春老てつきぬ詠めの若紫こそうつろふ色の花にまさらめ

暮春
藤

行春をひきとめもせで藤の花うこかぬ松にまつはりてさく

雨ことに色うすらさし紫を藤にゆづりて春はいぬめり

丑寅の方に桃李をはしめ花さく樹おほく栽て、年ことに花と共にハひの榮えんことを天地の神に祈りて
活業の咲榮えよと幾本の花の樹植ていのる天地

棄^シ捐^シ 瓦^一石^ヲ 掃^ニ蓬^一根^ヲ 桃^一李^一 新^ニ栽^テ 除^ニ鬼^一門^ヲ
歳^一々^ニ 逢^テ春^ニ 花^一 発^シ日^一 後^一榮^一 祈^レ福^ヲ 旧^一 乾^一 坤^一

も、すも、

も、ちとりむれくる園ハうくひすものうかる音に木かけにてなく

南北

なりハひハ桃の齡ともろ共にミちとせかけて咲栄ふらん

祐はる

天地もめでつらめやハ幾本の花の樹うゑていのる心を

髭つら

みちとせになるてふ桃を数植て万代までもこゝに栄えん

宗きよ

めて植て心つくさハ花の樹も家もさかえん年々のはる

儀

花さかハ牛もつなかんはらからのちきりもなさん桃うゑし園

徳

幾本の桃わかくと花さかハ春ハたかねやこゝにとつかん

與

桃植て神にいのらハ玉くしけはこにたからハミちとせやへん

童

千早振神めてまし、花過て桃や李の実こそほしけれ

松榮

桃の樹を植て若やく君なれハミちとせ迄も老すさかえん

花の樹をうゑて春まつ風情かな 同

安政五年午十月

安政六未ことし五十の春をむかへて

わひつ、も又ひと、せをこゆるきのいそちとけふハあら玉のとし

ことし又江戸の花を母のもとへ贈るとて

江戸の花ことしも東風におくりなハあつまも春としらざらめやハ

春の頃国へ帰るやと人の問けれハ

梓弓春なれハとてあしたゆく花なき山にたかのほるへき

弥生の中頃菊を植て

植てよりあかだめつるそ菊の花こん秋の日をなくさめてさけ

古今集をよみ伊勢てふ人の歌々を見て

ちとせへて今も恋しき伊勢の海ふかき情の君か言の葉

首夏

花ちれハ又葉桜のうつくしかほよ草さくほと、きすなく

さ月の中頃松栄ぬしの近江へ帰るとて、おのれをもさそひけるに、なりハひのいとまなくて東にと、まり別れを、しみて
はねをおもミ心苦しき時鳥泣てけふより友したふらん

五月雨に木曾路を帰る人よりもゆかぬ袖こそぬれまさるらめ

牽牛花

ひゞく／＼にひ、に咲かへ又ひ、に幾朝かほのあらたなるいろ

洪水惜稼禾

七月田間秋氣微
稼禾欲熟穗先肥
烈風暴雨是何孽
看作波浪花実稀

たつくりの汗にこめたるたなつもの底のミくつとなるそかなしき

中秋対月感慨

農歎傷禾愁万尋
憂時誰亦撫孤琴
今宵不似去年月
肉食無由慰客心

秋夜即事

閑背寒灯憶故郷
隔窓蟋蟀啣隣牆
陸家何害無人訪
茶味喫來知夜長

懷郷

秋高枯葉已晨霜
朝鼓暮鐘空斷腸
隔將家山幾重夢
雨糸風片逗他郷

又

故一園一別已三秋
慈一母恩一情易結一愁
誰一作一征一鴻一生一羽一翼
千一山一萬一水一到一江一州

菊

春一來辛一苦幾一經一旬
半一歲為一君一勞一此一神
况一遇一開一花新一霽一日
看一紅一看一白一擬一間一人

うゑしより秋をちきりし菊の花けふわかうきをなくさめてさく

敗一梧一鳴一舍一暮一秋一
故一國一回一頭一独一粲一然
起一押一東一窓一閑一視一菊
清一香一各一自一鬪一婢一娟

たち出て見ても淋しき秋の日を菊なかりせハいか、おくらん

時一有寒一花一薰一四一隣一
滿一園一秋一氣一脱一紅一塵一
陶一公一去一後一請一休一悔一
愛一汝一到一今一還一逸一民一

隣にも菊や咲しと人いはん園にあまれる花の色香に

世のうきも暮行秋のかなしさも菊ミるほとハ忘れてそすく

老ぬとて何かなしまん菊を見よ杖をつきても色盛りなり

九月晦日夜

かたりあふ人しなれとぬるもをし今宵限りの秋と思へば

十月愛菊

荏シ一シ苒シ 秋シ一シ光シ 漸ク 欲レ 回シ 金シ一シ虫シ 声シ一シ老テ 総テ 塵シ一シ埃シ
東シ一シ籬シ 日シ一シ暖シ 菊シ一シ猶シ一シ美シ 独シ一シ喜フ 小シ一シ園シ 冬シ 未レ 来シ

神無月籬の菊ハうつくしくわか園にのみ秋ハのこれり

舞鶴と名つけし菊を得て

うれしさにたち居のあしのふみところ手の舞鶴もしら菊の花

色もよし花よし葉よしみよしの、雪ともめつるしら菊の花

朝おきて

よしあしハ神と仏にまかせをきわか身のほとけふをつとめん

夜ねる時

あすハ又朝とく起てつとめなんけふも事なくぬるそ嬉しき

安政六年未十月